

長期不登校児の心理療法過程

青 柳 宏

A Psychotherapeutic Process for a Boy of Long-term Non-attendance at School

Hiroshi Aoyagi

I. は じ め に

不登校の問題が社会的な問題として取り上げられるようになってからかなりの年月がたっているが、不登校児童・生徒の数は減少するどころかますます増加の傾向にある。佐藤¹⁰⁾によると、不登校児童・生徒数は小学校では1986年頃から、中学校では1975年頃から年々徐々に増加しているという。また児童・生徒数の自然減少が続いていることを考慮に入れると、不登校の量的広がりにはもっと大きいと述べている。平成7年度学校基本調査報告書⁹⁾でも、「学校ざらい」を理由に50日以上休んだ中学生は51,365人と過去最高となっている。

不登校への援助形態¹⁰⁾としては、日常生活の中での援助的かわり、専門的治療による援助的かわり等多様なものが考えられるが、実際にはいくつかの形態を組み合わせた形での援助が必要である。長期間の不登校になると、心理的な専門的治療だけでなく、学力低下や社会的経験の不足による対人関係の問題等をいかに解決するかが重要になってくることも多い。今回報告するMは、小学校2年生の2学期から不登校となり、筆者がかかわった時点で4年半の間一度も登校していない。実際にMの場合も、勉強が遅れていること、友達関係のこと、不登校生徒と関われる場所を求めるなど、筆者1人の関わりでは解決できない問題も多く、問題解決のためには両親を始め、家庭教師、T中学の先生、M中学の先生、O校長、児童相談所、不登校の仲間、友達等多くの人の協力が必要であった。今回はMとそれらの人々との関係を通して、不登校を援助する関係者の連携について考えていきたい。

II. 事 例 概 要

[クライアント]

M君、12歳、中学1年生男子（初診時）。

[主訴]

不登校。

[現病歴]

小2の4月頃から朝になると体調が悪くなる。唾や痰が口にたまって、苦しい。9月から不登校。以後生育歴に見るように、一度も登校していない。

[家族]

父親：40歳、会社員。男3人兄弟の2番目。人当たりはよいが、人間関係は下手である。頑固なところがあり、自分の意志を出さない。家でも黙っていることが多い。

母親：40歳、主婦。4人姉妹の末っ子。自分でやらないと気が済まないところがあり、子供に対しても押しつけや、命令が多かった。父親も、母親から押しつけられていると感じている。

M：12歳、中学1年生。かなり神経質なところがあり、歯医者へ行く時や車で旅行に出かける時にも緊張して吐いたりすることがあった。友達関係でも、相手がどう思うかが気になり自分から行動できないことが多い。

弟：9歳、小学4年生。甘え上手であり、母親も適切に対応できる。幼少時は母親から離れず、Mの幼稚園の遠足にまでついてくるのでMが怒ってしまい、兄弟仲が悪くなったこともある。

[生育歴]

結婚して2年後に出産。正常分娩、2805g。母親は妊娠直前に膀胱炎で薬を飲んでいたので心配した。父親は「心配ならおろしてもいい」と言った。軽く考えているのかなと、母親はショックを受けた。出産は軽かったが、その後の処置で普通の人の3倍位かかった。母体が疲れきっていたという。母乳の出が悪く、苦勞した。母親も「スムーズに行かないな」と感じていた。夜泣きが多く、母親が寝不足となり、高熱で2日程入院。離乳食には苦勞しなかった。人見知りもなく、人なつこい。11カ月で、始歩、始語。

トイレットトレーニングはスムーズにいった。2歳の頃、母親が訪問販売の仕事をするようになり、母親の姉やいとこの所に預けられた。3歳頃反抗期。弟の誕生を楽しみにしていた。特定の友達と遊ぶことが多く、年上の子が入るとダメになってしまう。

幼稚園の頃、自転車の練習をする時に、母親の言うことを聞かない。性格が合わないという感じがあった。通園するのを嫌がって泣いたり、食欲もあまりなかった。家では活発だが、集団の中ではおとなしい。良い子という印象。家で発散する感じ。年長になると活発になり、友達を蹴ったり、殴ったりするようになった。12月に父親の転勤により、A市からM市へ。Mは諦めた感じがあり、担任も心配していた。親はMには友達ができないだろうと思い、ファミコンを買い与えた。Mは消極的であり、元気のいい子にあこがれていた。

小1：朝出かけるまで行動が遅い。学校へ行きたくないという感じが有りあり。母親の方が胃が痛くなった。学校ではおとなしく、自分の意志を言わない。友達には優しく、友達には好かれた。

小2の4月頃から体調が悪くなり、朝になると微熱、腹痛。病院では、精神的なものと言われた。信頼していた友達がサッカー少年団に入ったが、Mは入らなかった。他の子が遊びに来て、あの子はいや、この子は嫌いと言う。弟の友達を取り、その子と遊ぶ。Mと弟の関係も悪化し、弟が一方的にやられる。母親が注意すると、弟ばかり可愛がると恨む感じがある。自分の気持ちを言葉で表現しないで、行動で示す（すねたり、物にあたる）。

夏休みの前頃から、唾がたまって苦しいと言う。学校まで行ってすぐ戻ってきたり、アパートの玄関までしか行けない。夏休み中も体の具合は同じ。家族でキャンプに行ったが、食事後に吐いた。後にMが言うには「あの時から学校に行けなくなった」という。家族でのスキンシップが大事と思い、母親が計画したキャンプだった。Mは文句を多く言っていたが、親はあまりMの意思を気にしなかった。親の都合で動いていたところがある。

9月初めまで通学。S治療者のカウンセリングを受け休ませるようにしたら、すごくいい子になった。親はMの言う通りにするようにした。それまでは母親が行動を決める傾向があった。母親もMも調子が良くなったら、今度は弟が幼稚園に行くのを渋るようになり、「迎えに来て」と

言ったりする。するとMが母親の邪魔をする。そこで2人とも9月末まで休ませることにした。家では喧嘩ばかりしている。Mは「弟ばかり可愛がる」という。Mの方が、すねたり、反抗したり、親の困る行動をする。担任が尋ねてきても、Mは嫌がって会わない。友達が来ても、罵声を浴びせて追い返す。

小3の頃は家に閉じこもる生活。5月に近くに引っ越す。3年の終わり頃から、元気になると弟の友達と遊ぶようになった。

小4：友達と遊んでもすぐに帰ってくる。

小5：デパートで「おぶって」と父親に要求。母親と寝る時も弟と取りあう。「買ってくれ」と言う要求が多い。親の言うことを予想して我慢したり、安い物を買った後で、本当はこれが欲しかったのに、と言ったりする。M自身も何が欲しいのかわかっていない。親も「またか」とうんざりする。

小6～現在：友達（3人）と遊ぶことが多い。親と外で遊ぶのを嫌がる。最近1人で寝る。母親に「一緒に寝たいな」と言う一方で、ベッドを欲しがり、弟に「もう1人で寝ないとダメだ。俺も1人で寝ないとな」と言ったりする。両親の部屋で寝たい時もあるけど、廊下が怖いから行けない。自由に遊ぶタイプの友達には自分の意志を言うが、優等生タイプには従う、気遣う感じである。

Ⅲ. 治療経過

小2の9月からS治療者のカウンセリングを受けていたが、S治療者が別な大学に移ることで、筆者が面接を引き継ぐことになった。小学校卒業後の3月23日にS治療者の紹介で両親に会い、その後インテーク面接を行い、上記情報を得た。

第Ⅰ期 親面接 X年3月～X年10月

S治療者との面接では、最初はMも面接に行っていたが途中から両親面接のみになった。筆者も当面親面接だけを行うこととし、できるだけ両親共に面接に来てもらうということで面接を開始したが、父親は仕事の都合があり、22回中7回しか来れなかった。しかし面接を嫌がっているという感じはなく、仕事優先ではあるが、可能な限り面接に来ていたようである。

[#1回～#8回] (#1は、第1回親面接の意味)

父親が中学に行き、担任と面談。Mのことを理解してくれた、と安心して帰ってくる。月1回父親が学校へ行き家庭での状況を知らせれば、進級も考えてくれるという。父親は進級、卒業のことが気になっている。Mに学校のことを話したら嬉しそうだった。Mは電話で友達に中学の様子を聞いたり、自分から友達の家遊びに行ったりしている。食べ物で兄弟喧嘩が多い。Mは「喧嘩を止めないで欲しい」、「この頃弟は反抗的なんだ」と言う。夫婦喧嘩もあり、母親は「夫は私の苦勞を理解してくれない。Mの気持ちも分かってほしい」と言う。こういう話を夫にすると、夫は押しつけられているという感じを持ってしまう。両親共に気持ちの伝え方が下手である。母親はMの気持ちを理解したい気持ちと、否定的な気持ちと両方ある。東山の「母親ノート法」⁴⁾のやり方を説明し、Mとの会話をノートに書いてきてもらい、それをもとに面接を行う。

[#9回～#16回]

母親に甘えるようになった。母親の膝に乗ったり、歯を磨いてもらったり、トイレも母親につ

いてきてもらい、ドアを開けたまま用を足す。小さい時ついてきてくれなかったからだと言う。寝る前がMにとって安定した時間。会話も多く、甘えも出しやすい。母親もスムーズに対応できる。しかし母親が疲れていると、遠慮して甘えてこない。親子でゲームをするが、誰かが不満な顔をしていると、「嫌々やっているの?」と聞いてくることもある。伊藤の『登校拒否は言葉で変わる』⁶⁾のやり方を説明し、具体的な言葉の対応の仕方を指示する。母親は良く理解したようである。兄弟でキャッチボールをするが、弟に対して変なボールを投げる。攻撃的で、胸にたまっているのをぶっつけている感じである。

[#17回～#22回]

夏休みに入り友達とよく遊ぶ。友達の中にはタバコを吸っている子もいて、親としては友達関係が気になる。父親と母親ではMの行動の理解が異なっている。父親の理解は表面的なことが多い。母親はMの気持ちを理解しようとするが、うまく行かない。母親は、「夫は不満があっても直接言わない。家庭でも身体を動かすことには十分協力してくれるが、妻が不満を言わないように、爆発しないように気遣う感じ。喧嘩や話し合いをしたいと思うが、表面化しないで不満がたまる。心の部分で関わって欲しいと思う」と夫への不満を述べる。

第Ⅱ期 家族面接 X年10月～X+1年2月

家族面接を4回、両親面接8回、母親面接2回と父親も積極的に面接に参加してくれた。

[#23回～#28回]

治療者が提案した家族面接を、月に1回ならいいとMが承知してくれる。明るくて感じの良い子という印象であった。笑顔も見られるが、声が小さい。中学生にしては子供っぽい(小学生みたい)感じがした。Mは「勉強と友達のことが気にかかる」と言う。Mが親に望むことは、父親へは「勉強のことをいわないで欲しい」、母親へは「うるさく質問しないで欲しい」。家族面接の場面で、Mと両親との会話が成り立たない。両親ともMに言い負かされてしまう。Mはきちんと答えてくれることを求めているようである。夫婦関係に進展はなく、会話のない生活が続いている。父親が変わったところは、子供との会話が増えたこと。担任の家庭訪問が2回あった。

[#29回～#36回]

Mは最近両親の腕を取ったり、接触を求めてくる。父親は義務的に関わっている感じで、すべきことをすれば後は自分の時間という感じの関わりである。Mは「良い学校なら行きたい。でもT中学には不良がいて怖い。勉強のことが一番問題。漢字が読めない。数学は好き。家庭教師について小学校の勉強をしているが、英語は全くしていない」と言う。同級生に比べて英語の遅れが一番少ないこと、新しい科目である英語を習得していくことでMに自信を付けさせること、Mと毎週定期的に会う時間を作ることを考え、毎週面接室で英語の勉強をすることを提案する。面接室で勉強するのは緊張するというが、会う時間を増やすことは良いというので、週1回の面接を行うことにする。学生と会うのは嫌なので(面接は短大の研究室で行っている)、夜の7時からとする。

第Ⅲ期 Mとの面接 X+1年2月～X+1年11月

この時期から、両親面接とMとの面接を別々に行う。両親面接20回、母親面接11回、父親面接1回、Mとの面接は34回である。

[#37～#40、M1～M8] (M1は、Mとの第1回面接の意味)

英語の勉強の時間と話し合いの時間の割合や、どちらを先にするかはMに任せる。勉強時間は30分位。話だけで終わるときもあれば、ほとんど勉強で終わるときもある。歌は好きだけど、音痴なのでカラオケに誘われても行かない。声も小さく、語尾もはっきりと言わない。家でもはっきり言わないことが多い。Thの前では緊張すると言う。Thは声をハッキリと出すことが必要と考え、英文の暗唱を英語の宿題として出す。母親の前で暗唱した英語を言ったりする。弟と張り合うことが多いが、一方で弟を気にかけるところもある。弟は外で友達と遊ぶことが多くなり、それが寂しいのか弟を家に居させようとする。父親が中学で厳しいことを言われ、卒業のことを心配し児童相談所へ行く。面接では父親が積極的に話をするようになった。Mの気持ちも少しずつ受けとめることができるようになってきた。夫婦関係も良好である。

[#41～#48、M9～M15]

2年の担任は20代の男性。家庭訪問があったが、Mはそれほど緊張しなかった。Mは「小さい頃母親によく殴られた。「恐いお母さん」というイメージしかなかった。S治療者との面接以降殴らなくなった。父親に殴られることはなかったが、怒ると母親より恐い。以前は良いこと言っているなと思ったが、今はダメな父親になった。Mが悪いことをしても、父親の方が謝ってしまう。きちんと叱って欲しい。叩かれた方がいい。自分のことを本当に心配していると思うから。また親を叩きたいと思っても、自分から叩くわけには行かないけど、親から叩いてくれれば自分もたたき返せるから。両親の関係は、母親が少し上。父親は遠慮している。Mと話をしているときも、父親は母親の様子をうかがっている」と言う。両親もそのことをわかっており、関係を変えていく必要性を認めている。父親は意識してMと関わっており、本気でオセロやプロレスをしている。家族で朝食を食べることを父親が提案し、決定した。Mは面接の前には緊張するようで、面接に出かける前になるとトイレに行きたくなる。S治療者の時も、行く前が嫌で行くのをやめてしまったと言う。

[#49～#58、M16～M24]

Mも児童相談所へ行くことになった。児相で同年代の子供に関心を示す。児相では、親が勉強や学校のことを言い過ぎるのではないかと言われた。学校を無視しなくてはならないのかと父親が不安になった。父親は何か言われると動揺してしまう。夫婦で話し合い、今まで通りやっていると決意。Mが勉強の遅れを言うと、父親はそれを何とかしてやれば学校へ行けるのではと思っている。

友達があまり遊びに来なくなった。Mは「勉強より友達が大切。自分からは遊びに行かない。行っても遅くまでいると後で陰口を言われたりする。友達の前では性格が変わる。ガキっぽくなる。ざっくばらんに言えない。相手も自分に気を使うし、自分もそうなる。初対面のような感じ。友達とは言えない。転校するか引っ越しするかしないと友達ができない」という。キャッチボールは、以前はストレスを発散するようなスピードボールを投げていたが、コントロールして投げられるようになった。

父親とプロレス。父親もあまり手加減しないでしている。Mが2回勝った。父親に英語の問題を出す。Mが先生役。今までわからない漢字を聞くことを嫌がっていたのに、聞いてくるようになった。父親も以前より積極的に子供に関わるようになったが、対応の仕方はまだまずいところがある。父方祖父（父親の父）は父親が6歳の時に死亡しており、父親としてどういう風にしていいかわからないところがある。父親もMと関わりを持とうとするが、うまく話がかみ合わない。父親は優しく受け入れるのと厳しさがバラバラ。弱さもあり、自分の考えを言い通せない。強い

者に言い負かされる。父親も「父親」になる時期に来ており、その訓練をしている。徐々にではあるが変わってきている。夏休みにA市へ。Mの希望でカラオケへ行くが、Mはうまく歌えなくて、音痴だなと言っていた。

両親とも相手の気持ちをくむことが苦手だった。それで変えようとしてきたが、極端になってしまった（子供の言いなりになる感じ）。バランスを取ることがこれからの課題。夫婦にコミュニケーションのズレがあるが、面接の場でお互いの気持ちや考えを理解していくことにする。

[#59～#68、M25～M34]

夏休みあけから友達との接触が多くなった。友達とカラオケに行き2曲歌ったが、うまいと言われた。夜中の1時に呼び出されて出かけたり、友達の家に泊まったりする。非行傾向のある友達なので親は心配しているが、Mは自分を信頼してくれないと不満である。友達（A君、B君）はMに対して遠慮する感じがあるので、Mも遠慮してしまう。本当の友達はいないという。

学校の先生は不登校の生徒を無視している。担任も2～3ヶ月に1度来るくらいだし、悪い親も多い。O校長みたいな先生が良い。担任は消極的だが、副担任は積極的に理解がある。担任はできるだけ家庭訪問を多くしようと言ってくれるが、Mと担任との関係はぎくしゃくしている。Mは「学校へは行きたいが、T中学には行きたくない。勉強が追いつかないし、友達関係が心配」と言う。

家では親の行動を批判したり、父親と喧嘩することもある。友達や弟、勉強について親子で話し合うこともあり、お互いに相手の気持ちを理解できるようになってきている。

第Ⅳ期 登校へ向けて X+1年11月～X+2年5月

両親面接13回、母親面接8回、Mとの面接19回

[#69～#80、M35～M47]

友達2人と喧嘩し、友達がいなくなる。Mは「自分から積極的に友達を求める気はない。自分から誘えない。断られてそのことを人に言われたらどうしよう。良く思われたい。気に入られたい。その気持ちが半分くらいになれば、堅苦しくなくなるのに」という。中1の不登校女子の誘いで映画を見に行ったり、バレンタインのチョコをもらったりする。

機嫌良く担任を待っており、緊張した感じもない。テープを貸したり、国語を教えてもらったりと良い感じである。家庭訪問の回数も多くなった。児相やカウンセリングに行くことも出席日数なると知り、週1回児相に行くことにする。高校入試を受験することに決め、そのためにはどうするかを考える。Thが現実の受験について告げるとMはショックを受けたようだが、受験することに覚悟を決めたようである。面接でも将来のことを話すようになる。しかし勉強に身が入らず、イライラすることも多いようである。

ThがT中学で講演することになり、後日Thが担任、校長、教頭と面談する。担任とMとの交流をできるだけ多くしてもらうことをお願いする。また両親へは、今までは父親だけが中学に行っていたが、両親で行くように指示する。

新しい家庭教師として、工大生男子と短大生女子が来るようになる。Mは気に入った様子である。父親とMとの会話はかみ合わない。父親は自分からしてやることは得意だが、子供からの要求に対応するのが難しい。弟との関係は良くなっており、弟の面倒を見たりしているが、親はMが弟を虐めていると思いこんでいると不満を述べる。

[#81～#89、M48～M53]

家族の中で話し合えるようになった。Mも悩んでいることを吐き出すように話す。受験のことも気楽に話せるようになり、Mも真剣に考えている。Mは「きっかけがあれば成長できる。自分と同じレベルの人の所へ行けば成長できる。学校へ行けない人や勉強が遅れている人が行く塾がないか？同じ仲間がいるとやる気が出る。高校へ行きたい。行くために勉強したい」という。Mも現実的にどこの高校を受験するか考えるようになった。

親子でテニスをするようになり、Mも親のアドバイスを素直に聞くようになった。O校長との文通も再開し、Mも内申点について質問したりしている。

第V期 M中学に登校 X+2年5月～X+2年10月

両親面接8回、母親面接3回、父親面接1回、Mとの面接18回

[#90～#101、M54～M71]

O校長が家庭訪問した際に、M中学（O校長の中学）に通学することを勧められ、行くことにする。1年前も、先月にも同じことを言われたがその時は断っていた。当日はO校長が迎えに来てくれ、給食を校長、教頭と一緒に食べた。8年ぶりの給食だった。それほど緊張しなかったという。Mは「T中学は不良がいるからいや。M中学は不良がいないが、型にはめられているようでいや」。そういう一方で、「不良は自分のことをはっきり言うから良い。そういう友達関係にあらがれる。今までの友達関係は距離が遠い」という。

M中学へは最初週1回の登校を考えていたが、あまり緊張しないで行けるというので、6月は19日間登校した。M中学はMの自宅からは遠いため、親が車で送り迎えしている。7月は毎日登校。夏休みは今までで一番良かったという。夏休みあけの登校では、生徒の視線が気になり、塀を乗り越えて学校に入ったりしている。学校に行くのが嫌になってきており、休んだり、遅刻することもある。学校へ行くことの利点としては、「生徒に慣れたこと、授業の時間に慣れたこと、生徒の先生への話し方が分かったこと、生徒同士の口の聞き方が分かったこと」だと言う。学力テストを受ける。初めてのテストで緊張したが、思ったよりやればできそうと自信を持ったようである。

Mの自分に対するイメージは、「普通の人と違う、凡人ではない」。「理想のイメージは、人から尊敬、信頼される人。そうするためには、自分から信頼すること。でも信じたことないから、裏切られたこともない。自分で知らないうちに相手を傷つけているんじゃないかと思う。人から認められていない。だから自信がない、支えがない、勇気がない。これがあれば行動できる」と言う。

第VI期 T中学に登校、そして高校へ X+2年10月～X+3年4月

両親面接7回、母親面接6回、父親面接1回、Mとの面接17回

[#102～#112、M72～M87]

O校長から「T中学と進路の相談をしたか？」と父親が聞かれ、M中学の帰りにそのままT中学へ行く。その際、父親がMに「一緒に行くか？」と誘うと、Mは不安を感じながらも一緒にT中学へ。Mは「高校へ行くためには、やらなければならないことをしなくては」と言う。T中学の先生に気に入られようとしている感じもある。そのことをきっかけとして第3回の学力テストをT中学で受けることにする。テストは毎回点数が上がっており、そのことでテストへのプレッ

シャーを感じているようである（第1回は300点満点中82点、第2回は116点、第3回は126点、第4回には151点を取っている）。中1の時の副担任K先生に理科を教えてもらう。11月下旬からM中学へは週に2日、T中学へは4日行くことにする。

M中学で、中2の不登校生徒（S君）と一緒にいる。S君は自分のことを一方的に話す感じで、Mの話聞いてくれる人ではないが、悪い感じはしないという。その頃から帰りは1人でバスで帰るようになり、S君の家で遊んだりしている。また同じアパートのT君（T中学3年）とも良い感じで話せたと嬉しそうである。

2月からはT中学にだけ登校。Mの希望で私立はN高校、公立はH高校を受験することに決定。K先生のはからいでN高校の先生に会う。T中学の先生は優しい先生が多いという。N高校入試の時、Mはわくわくしており、興奮していたようである。「高校へ行ったら、通信教育、児相、面接、家庭教師、全てやめて、新しい出発をしたい」という。

校長室で卒業式。いい感じだった。「家庭教師、O校長、Th、S治療者等、今まで良い先生に巡り会えた」という。

〔#113～#114、M88～M89〕

学校に行っているから、外を歩いてもビクビクしなくなった。毎日普通に教室に登校できており、1泊研修にも参加できた。H君とも打ち解けて話せる。新しい友達もでき、遊びに出かけた。する。「毎日が感動的。黒板拭き、チョークで書くこと、教室に入る午後の日差し、全て感動することばかり」という。

Ⅳ. 考 察

氏原¹²⁾は、「子供がまともに成長するためには、さまざまな人間関係が必要である。また、子供に対する援助の人間関係がけっして一様なものではなく、多面的な関わりを含むものであり、子供のためにはそうした専門領域を異にする専門家たちの協力が不可欠である」と述べている。今回のMの場合も、さまざまな人間関係が必要であり、専門機関が必要であった。誰かが積極的に関係者の連携を取ったわけではないが、必要なときに必要な人が現れ、必要な働きかけをMに行うことで治療が進展していったものと思われる。Mにとってそうした関係の持つ意味と、関係者、関係機関の連携を取るものの意味について考察したいと思う。

〔1〕Mの人間関係について

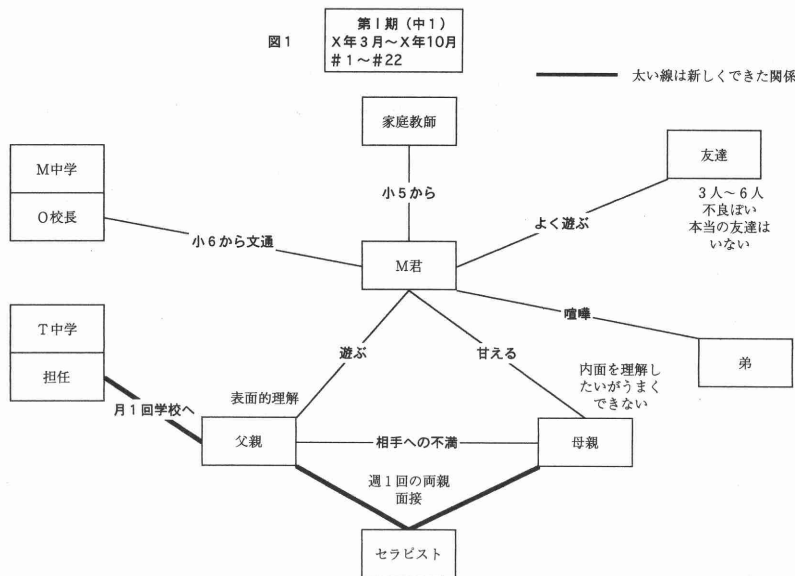
第Ⅰ期 親面接 X年3月～X年10月

図1がこの時期のMの人間関係である。Mにとっての新しい関係としては、Thが週1回の親面接を通して間接的にMに関わるようになったこと、T中学も父親を通してMに関わるようになったことである。継続している関係としては、父親、母親、弟、家庭教師（工大生）、O校長（小学校の時の校長、小6から文通を続けている）、友達（3～6人）である。

父親は積極的に話しかけたり一緒に遊んだりと関わりを持とうとするが、Mの要求を先取りして動いたり、またMに対する理解も表面的なことが多い。一方母親は、Mを理解したい気持ちと、Mを否定的に見てしまう気持ちと相反する気持ちがある。内面を理解しようと努力しているが、それがうまく行かないことを悩んでいる。Mも母親に甘えるようになってきている。弟とは喧嘩することが多いが、遊びのようなどころもあり、弟の運動会に出かけたりもする。家族全員で遊

べるゲームをしたがり、嫌々やっている人がいると不満げである。夫婦はお互いに相手への不満を言うことが多く、夫婦での話し合いはうまくできない。

友達とは良く遊んでおり、自分から出かけたり、また家に来たりと出入りが多い。友達関係は良好であるが、不良っぽい友達が多く、親としては心配しながら見守っている状態である。中学のことが話題になってもMは嫌な感じもなく、むしろ積極的に学校の様子を尋ねたりしている。Thとしては中学との関係を絶やさないためにも、月1回父親が中学に行くよう指示する。



第Ⅱ期 家族面接 X年10月～X+1年2月

Thは新しい展開の必要性を感じ、またMにも会いたい気持ちが強くなったため、家族面接を提案する。Mはすんなりと了承してくれ、MとThとの直接的な関係が始まる。しかし家族全員の中での関わりでもあり、3回目の家族面接の後半にMと2人だけで面接した時に、「親に秘密」の話が出てきたこともあり、Mとの週1回の個人面接を提案する。

父親は積極的にMと会話をするようになったが、どこか義務的な感じの関わりである。母親はMの内面を理解できるようになったが、現実の対応の面ではうまく気持ちを受けとめられないようである。家族のコミュニケーションがうまくいっておらず、お互いに気持ちの伝え方が下手である。相手を理解する意味でも、両親システムの強化の意味でも、面接の中で夫婦で話し合いをさせる。

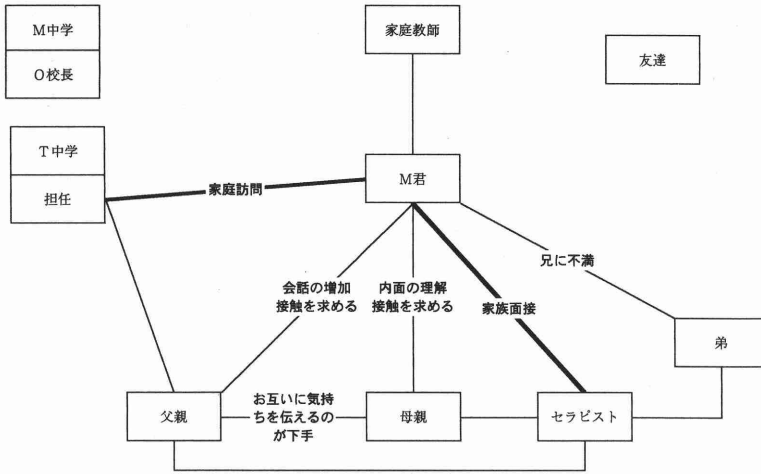
担任の家庭訪問が2回あったが、Mはかなり緊張していたようである。

第Ⅲ期 Mとの面接 X+1年2月～X+1年11月

この時期の新しい関係としては、Thとの個人面接が始まったこと、父親が児童相談所と関わりを持ったこと、それをきっかけとしてMも児童相談所に行くようになったことである。児相では同年代の子供に関心を持ったようである。2年生になって担任が代わったが、家庭訪問の時に緊張しないで会うことができた。しかし先生全般に対するイメージは悪く、良い先生はO校長だ

図 2

第Ⅱ期(中Ⅰ)
X年10月～X+1年2月
#23～#36



けである。

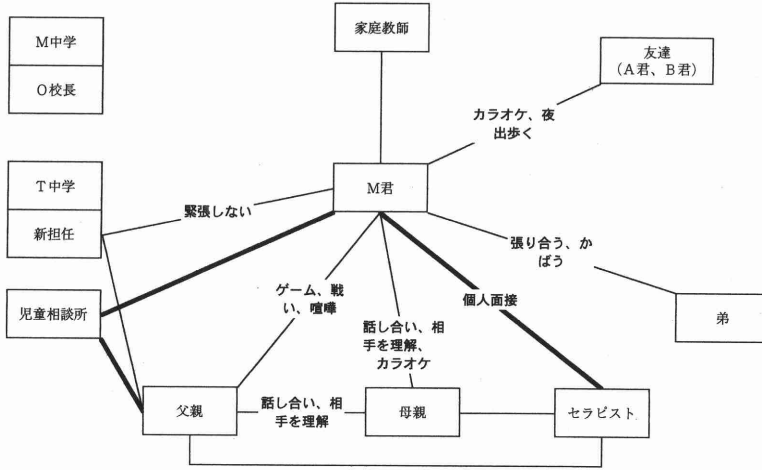
面接場面では、英語の時間の時に特に緊張するようである。間違ふことや喋ることが嫌だという。Thのことを知らないから緊張するんだ、と色々質問してくる。大きな声で英語を暗唱する宿題を与え、徐々に英語が発音できるようになっていくと共に、家では父親に英語を教えたり、母親の前で英語を暗唱したりと積極的になってきている。

父親はMの言い分を認めたり、Mの気持ちを少し受けとめることができるようになった。ゲームやプロレスを本気でしており、Mは父親の強さを実感している。一方できちんと叱ってくれないこと、頼りないこと、自分を信用してくれないこと等父親の行動を批判することも多くなった。時に喧嘩になることもあるが、その時もMは自分の気持ちを十分表現できるようになっている。一方で、父親は喋るのが苦手だからと父親の気持ちも理解している。母親に対しては、弟だけに優しい、大事にしてくれない、自分が全部正しいと思っている、等の不満を述べるが、そのことを話題として話し合いが行われ、Mも納得したり、母親の気持ちを理解したり、母親の悩みを了解しているようである。夫婦の間でも話し合いを続けることによりお互いの考えの違いを理解するようになり、夫婦のコンビネーションもうまく行くようになってきた。弟に対しては、張り合ったり、生意気だと言ったりする一方で、Ⅰ期、Ⅱ期と違って弟をかばったり、相談に乗ったり、一緒にビデオを見たりといった関係も多くなっている。

友達(A君、B君)とは数日おきに会い、ゲームセンターに行ったり、カラオケに行ったりしている。音痴を気にして人前では歌わなかったのに、家族とカラオケに行ったのをきっかけにして、友達とも行くようになった。夜の10時頃に呼び出されて出かけることもある。断ると友達がいなくなると言う。Mと友達との関係は、Mが学校に行っていないということもあるのか、言葉遣いもお互いに遠慮している関係だと言う。Mは本当の友達1人もいないという。表面的な交流は頻繁にあるが、心理的にはかなり距離のある関係である。Mは、友達が遠慮して気遣った関わり方をしてるからと言うが、実際はMの方が相手がどう思うかが気になり積極的に近づくことができないようである。

図3

第Ⅲ期（中1～中2）
X+1年2月～X+1年11月
#37～#68、M1～M35



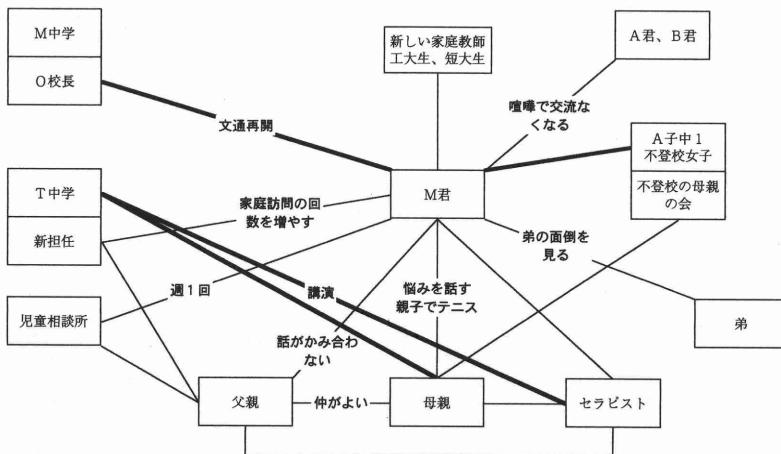
第Ⅳ期 登校へ向けて X+1年11月～X+2年5月

この時期の新しい関係としては、11月に友達（A君、B君）と喧嘩して関係がなくなってしまったこと、T hがT中学で講演をしたこと、そのことがきっかけで学校と連絡を持つようになったこと、家庭訪問の回数を増やしたこと、母親も学校へ行くようになったこと、1月からO校長との文通を再開したこと、児相に週1回定期的に行くようになったこと、新しい家庭教師（工大生、短大生）が来たこと、中1不登校女子との関係が生じたこと等、多くの関係が生じている。

友達との関係は途絶えてしまい、5ヶ月間ほどは友達と会っていない。その間不登校の女子と

図4

第Ⅳ期（中2～中3）
X+1年11月～X+2年5月
#69～#89、M36～M53



会ったり、「同じ仲間が欲しい、仲間と勉強する場が欲しい」と訴える。T hとしてはそういう場を提供できないもどかしさや、そういう機関の必要性をあらためて認識させられた。面接の中では、中学に行きたいこと、高校にも進学したいこと、将来のこと等が話題として出され、現実をふまえた話が出るようになった。自分の現状と現実を知ることはMにショックでもあったが、Mは自分はきっかけがあれば変われると言うようになる。T hとしてもどういうきっかけをMに与えることができるのか、T hが与えるよりも別な機関や人からの働きかけが必要なのか、悩むところであった。

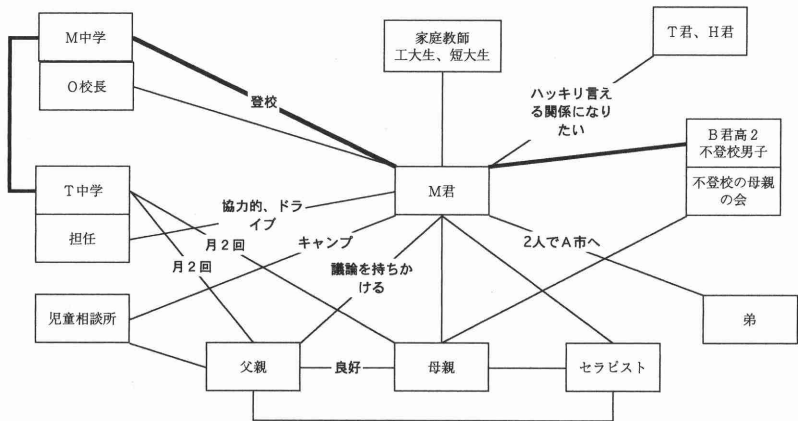
父親はできるだけMと接触を持つようにしているが、Mの要求に対応するのが難しいようである。Mが必要とするときに関われないようであり、Mは「親はわかってくれない」と言う。その点母親はうまく対応できているようであり、Mも母親に悩みを訴えたりする。弟の面倒を見るようになり、兄弟仲は良好である。夫婦関係も良好である。

担任も協力的であり、Mも緊張することなく話している。Mが音楽のテープを担任に貸したり、勉強を教えてもらったりと良い感じである。

第Ⅴ期 M中学に登校 X+2年5月～X+2年10月

O校長の働きかけがきっかけで、M中学との関係が生じる。Mが信頼している唯一の学校関係者はO校長であり、O校長のいるM中学に登校することは自然なことである。しかし本来T中学に在籍している生徒が別な中学に登校することは、色々問題もあったと思われる。それを受け入れてくれたM中学の先生方と、また変な「自分の生徒」意識を持たず協力的に関わってくれたT中学の先生方の協力は、Mにとって非常に大きな意味を持ったと思われる。O校長の働きかけでM中学とT中学の連携をうまく取ることができ、T中学の担任だけでなく他の先生も協力を申し出てくれる。Mも担任とドライブに出かけたりしている。M中学では、給食を食べたり、教頭先生と話したり、特学の教室に入ったり、突然部屋に入ってきた生徒と話したりと多様な経験をしている。学力テストも受け、その結果勉強面ではある程度の自信を持ったようであるが、一方公

図5 第Ⅴ期(中3)
X+2年5月～X+2年10月
#90～#101、M54～M71



立高校に進学するのは無理とわかりショックを受けている。

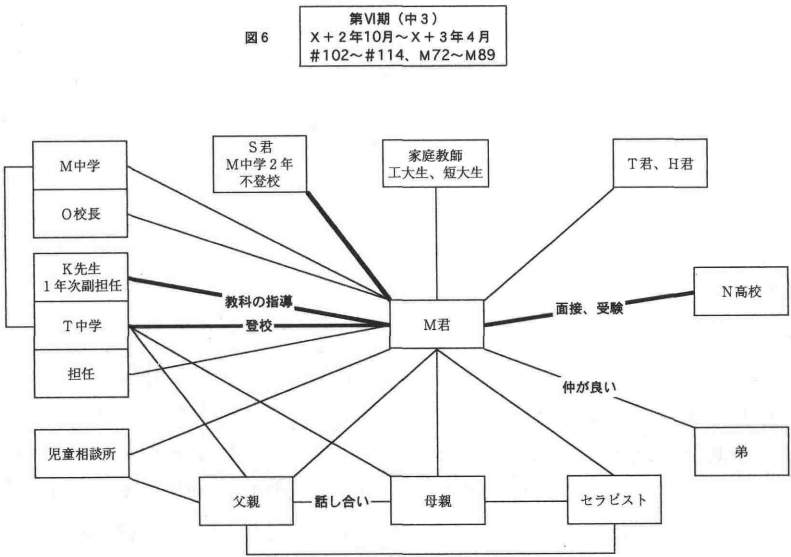
面接でも学校のことが話題となることが多く、生徒の視線が気になることや、学校では良い子の自分しか出せない辛さを訴える。Mは、自分は人と違って特別なんだとか、あの人はこう思っているに違いないと、自分で勝手に思いこんでしまうところがあったが、こうした経験を通し、少しずつ現実的に物事を考えることができるようになっていった。

積極的に自分から行動するようになり、児相のキャンプに参加したり、高2の不登校の男子と会って話をするようになる。T君、H君（T中学3年）とも話をするようになる。Mは2人と議論をしたり、ハッキリなんでも言えるような関係になりたいと思っているが、自分から積極的に誘うことはできない。

家族関係は良好であり、弟と2人でA市までいったり、父親に議論を持ちかけたりしている。夫婦の会話もうまくいっている。

第Ⅵ期 T中学に登校、そして高校へ X+2年10月～X+3年4月

父親の誘いがきっかけでT中学に行くようになる。担任以外の先生との接触も始まり、勉強を教えてもらう。「先生も生徒もM中とは違う」と否定的な感じで見えていたが、次第に「T中学の生徒と思われのが良い」、「T中学は優しい先生が多い」と評価が変わってくる。自分から積極的に行動しており、受験する高校も親と話し合い自分の判断で決めている。生徒の視線が気になり教室にはいることはできなかったが、高校生活には不安を感じていない。1月にはM中学、S君との関係が終わり、3月にはT中学、家庭教師との関係が終了する。「きっかけがあれば変わる」というMの言葉通りに、高校生活にはスムーズに入っていくことができた。Mにとっては初めての学校生活といいだろう。ありふれた学校生活がMにとっては新鮮なものとして感じられ、感動の連続である。新しい友達、ガールフレンド、悩みもあるが何とかやっていける、相談したいときにはまた会って欲しい、ということで4月にThとの関係も終了し、Mは新しい関係の中に入っていた。



〔2〕きっかけを与えることについて

Mの言葉で印象的だったのは「きっかけがあれば成長できる（変わる）」という言葉と、「学校に行けない人と一緒に勉強すればやる気がおきる。高校へ行きたい。勉強したい」という言葉である。Mのそういう気持ちを受けとめるだけでなく、具体的な行動や不登校の交流の場や勉強の遅れを取り戻す場の必要性を痛切に感じさせられた。「はじめに」で述べたように、不登校に対する援助としては、心理的な援助の場所だけでなく、勉強の遅れを取り戻す場所、不登校仲間と関われる場所、学校等の多様な場所が必要である。そこで多様な人と関わり、多様な経験を積むことが成長につながっていくのである。

そうした総合的な援助のあり方として、開原⁷⁾は「包括的治療指導」の必要性を述べ、宿泊治療指導の有効性を述べている。また倉淵⁸⁾は神経症的な不登校を対象にした名古屋市治療教育相談センターの試みを紹介しているが、そこでは治療教育相談部と相談指導学級部の2部門が設けられ、「相談部と学級部の両者による援助は、個別相談だけで治療するのに比べ、相乗効果を生み回復効果が非常に高い」と述べている。高橋¹¹⁾も「総合的連携療法」として、子供の要求に応じて社会資源を有効に活用し、互いに協力して子供や親や学校に対応していく方法を提唱している。また、この方法の場合、全体を総括する者の必要性を述べている。

しかし筆者の治療環境を考えると、短大の相談室ということもありスタッフは筆者1人であり、Mの要求を満たすためには他の機関や人間に頼らざるを得ない。勉強面では家庭教師が関わっていたが、中1の2月の時点で国語は4年生、算数は5年生上の教科書を勉強している段階であり、勉強面で追いついてから登校するということは無理な状況であった。英語は中学から勉強する科目であり、遅れも少なくある程度追いつくことも可能であると考え、またそのことがMの自信にもつながると思い、筆者が教えることにした。Mとの関係を付ける意味もあったが、Mは緊張しながらも毎回宿題をきちんとしてきており、英語の発音や暗唱ができていることを誉めると素直に喜び、徐々に積極性も出てきた。高校に入ってから英語はMの得意科目になっている。

一方Mと学校や児相などとの関係を広げるうえで大きな役割を果たしたのが、父親とO校長である。父親は当初から月1回学校に通い、Mの様子を学校に報告し、間接的にMと学校との関係を仲立ちしている。父親と学校とのコミュニケーションはうまくいったとは言えない部分もあるが、いつでも新たな関係を結びうる基盤は形成されていたと言えるだろう。その関係はさらに母親が加わり、月2回と回数を増やし、Thが加わることで強化され、良好なものになっていった。MがT中学に行くきっかけになったのも父親の何気ない誘いの言葉である。さらに児童相談所とのつながりをつけたのも父親であるし、そのことがきっかけでMも児相に通うようになり、他の同年代の子供とのふれあいも経験することができるようになった。こうしてみると直接的なMとの関わりではごくしゃくしたところも見られたが、「きっかけを与える」という意味では父親は大きな役割を果たしていたと言えるだろう。

さらに現実に学校に通うという大きな変化のきっかけを与えてくれたのがO校長である。啐啄同時という言葉があるが、まさにMの内的準備が整った時にO校長の呼びかけがあり、M中学に登校することができたのである。Mが登校に向かって動きだそうとしているまさにその時に「適切な働きかけ」があったからこそ、Mは登校することができたのであるが、働きかけを行う「適切な瞬間」にはあまり拘らなくても良いのではないかと思われる（クライアントの内的な状態をよく把握することは必要であるが）。もちろん信頼関係を損なうような働きかけは問題であり、日教組教研集会²⁾でも不登校児の側から教師の安易な家庭訪問や同級生からの働きかけに対す

る異議が出されている。大事なことは働きかけに対するクライアントの反応を十分考慮しながら対応していくことであり、Mの場合もO校長は1年前にも、また登校する1ヶ月前にも同様の呼びかけをしているが、その時にはMの方が登校することを断っている。Mは嫌なときにはイヤと言えし、O校長もMの気持ちを受けとめ、そのことでMとO校長の信頼関係が損なわれることはなく、Mの内的準備が整った時にMは大きな一歩を踏み出すことができたのである。きっかけを与えたという意味ではO校長の存在は大きい意味を持っているが、同時にMの内的な準備が整うためには父親、母親、弟、Th、家庭教師、担任、兄相、友達等が大きな役割を果たしているのである。各人が各人の役割を果たし、また影響しあいそのことがMの成長に役立っていったのである。

V. おわりに

今回のケースでは両親の働きで多様な人がMに関わり、Mもその関係を広げていくことができ、登校に結びつけることができた。今後の課題として大事なことは、Mにとって意味のあった関係を他の不登校の子供にも提供することである。そのためには地域の社会資源を活用した、その子に応じた援助システムを作っていく必要がある。文部省も平成7年度からスクールカウンセラーの制度を導入しているが、藤田³⁾はスクールカウンセラーの配置が学校において持つ意味の1つとして「学校内に精神衛生上の問題に取り組む何らかの組織的連携(援助システム)を生み出すインパクトになりうることを」上げている。東山⁵⁾も学校のシステムと教師の資質を生かした学校カウンセリングのシステマティックアプローチを提唱している。

室蘭地区でも不登校の現状を知ることや各相談機関の連携をとる必要性から、室蘭保健所・福祉サービス調整推進会議の呼びかけで、1991年に第1回の会合が開かれている。以後保健所、胆振教育局、児童相談所、臨床心理士が中心となり時に応じて各教育委員会、福祉機関、学校の参加を得て、処遇検討会、事例検討会、研修会等を継続して開催している¹⁾。これらを通して地域の不登校に関わる関係機関の存在については相互理解が進んだが、肝心の不登校の子供に対してどう具体的に連携していくかについてはまだまだ不十分な状況である。各機関を統合することは不可能であり、高橋のいう総括者を作ることも無理がある。今後必要なことは、各関係機関のメンバーがお互いに交流を深め、クライアントの求めに応じて適切な機関や人物を紹介できるような関係になっていくことである。そういう積み重ねが各機関のつながりを深め、個々のクライアントの要求に応じた連携を取ることを可能にしていくのである。またそうしたことがメンバーが変わっても各機関の連携が継続していくことを可能にするのである。クライアントが多様な人間関係の中で成長するのと同じように、クライアントを援助する側も多様な機関との関係の中で成長する必要があるように思われる。

VI. 文 献

- 1) 青柳宏(1995)「室蘭における臨床心理士の活動および研修会について」、北海道臨床心理士会ニュースレター、第3号; p 8
- 2) 朝日新聞朝刊(1997、1、13)「不登校児への家庭訪問「居場所を奪う」と異議」
- 3) 藤田和也(1997)「養護教諭と学校カウンセリング」、『教育』、第47巻第2号、国土社; 69-79

- 4) 東山紘久 (1984) 『母親と教師がなおす登校拒否』、創元社
- 5) 東山紘久、薮添隆一 (1992) 『学校カウンセリングの実際』、創元社
- 6) 伊藤友宣 (1991) 『登校拒否はことばで変わる』、朱鷺書房
- 7) 開原久代 (1990) 「包括的治療指導の場から考える」、『教育心理』、第38巻第5号、日本文化科学社；66-71
- 8) 倉淵泰佑 (1990) 「神経症的登校拒否児とのかかわり」、『教育心理』、第38巻第6号、日本文化科学社；66-71
- 9) 文部省 (1995) 『平成7年度 学校基本調査報告書』
- 10) 佐藤修策 (1996) 『登校拒否ノート』、北大路書房
- 11) 高橋良臣 (1990) 「登校拒否児への総合的連携療法」、『教育心理』、第38巻第7号、日本文化科学社；68-71
- 12) 氏原寛、谷口正己、東山弘子編 (1991) 『学校カウンセリング』、ミネルヴァ書房